カナダ史点描

ルイ・リエルの反乱

カナダ連邦が結成されてからわずか三年後の一八六九年、政府はひとつの試練に直面した。いまのマニトバ州で、反乱が起きたのである。

ハドソン湾にそそぐすべての河川の流域――今日のケベック州北西部からオンタリオ州の北西部をへてアルバータ州南部にいたる広大な領域――は、一六七〇年に英国国王から勅許を得たハドソン湾会社が、毛皮取引のため一切を管理していたが、その一角にできた居住地が新政府にとって大きな悩みになっていた。

レッド川とアシニボイン川の交差する一帯は、ハドソン湾会社の重要な物資供給および通信の要地として栄えていた。住民の大半は、白人毛皮商とインディアン女性の混血で、主にフランス語を話すメティスであった。彼らは毛皮取引を生活の糧とし、毛皮やその他の物品を米ミネソタ州セント・ポールから運んでいた。また大勢で隊を組んでは、バッファロー（野牛）を追い、それを食料やテントにしていた。

しかしこのレッド・リバー居住地とセント・ポールとの経済関係が密接になるにつれ、ハドソン湾会社の支配は形骸化し、レッド・リバー居住地が米国に併合される恐れもでてきた。

そこでハドソン湾会社、カナダ政府、英国政府の三者は、協議の結果、同居住地を含むハドソン湾会社の領地を、一八六九年の末にカナダ政府に委譲することになった。

やがてレッド・リバー居住地に測量隊が派遣された。しかし彼らの行く手には、若干二十五歳のルイ・リエルが指揮するメティスが、測量を阻止しようと待ち構えていた。

メティスを中心とするレッド・リバー居住地の住民は、居住地一帯がカナダ連邦に編入されれば、東部カナダからたくさんの開拓農民や冒険者たちがやってきて、バッファローを追って暮らすこれまでの生活様式を破壊し、自分たちの言葉や宗教まで脅かすことになるとして、自分たちに相談なしの編入には強く反対していた。

その年の夏、売買は実施された。リエルは緊急事態を宣言し、〝臨時政府〟を樹立した。メティスの条件に合ったカナダ編入を連邦政府と交渉するためである。

反乱鎮圧に向かう警察隊。

レッド・リバー居住地は、一触即発の危機をはらみながら年をこした。その間、リエルの臨時政府は連邦政府と交渉を続けた。そして一八七〇年五月、マクドナルド首相の率いる連邦議会は、リエルが提案していたマニトバ州の設立とそのカナダ連邦加盟を承認する。この新しい州では、公用語としてフランス語と英語の使用が認められ、学校もカトリック、プロテスタントの双方が許されることになった。メティスの要望はほとんど満たされた。

しかし、その前に、リエルは大きなミスを犯した。彼の臨時政府に対して蜂起した英国系グループの一員を、銃殺の刑に処してしまったのである。

グループの指導者は、オンタリオの人々にリエルの処刑を訴えた。リエルの首には五千ドルの賞金がかけられた。連邦政府も、こうした状況に迫られて、レッド・リバーに軍隊を派遣した。

リエルは米国に逃れた。しかし、ことはそれだけではおさまらなかった。

レッド・リバー居住地のメティスはさらに西のサスカチュワン川のほとりに移動を余儀なくされていたが、すでにバッファローは姿を消し、また連邦政府に対する不満も高まっていた。そこで彼らは、リエルを呼び戻して、再び政府とかけ合ってもらうことにした。

リエルは一八八四年に、南サスカチュワン川に面するバトッシュに到着するが、連邦政府に対する不満の熱気の中で、だんだん正気を失っていく。そして自分を神から遣わされたメティスの救世主だと信ずるようになった。

やがて、メティスと連邦政府の民兵および警察との間に戦いが始まった。

リエルの側には、同じように連邦政府に強い不満を抱いていたインディアンも加わった。しかし武器、兵員、経験においてはるかにまさる政府軍の敵ではなく、二か月後、バトッシュは陥落し、リエルも捕えられる。インディアンの抵抗はその後も続いたが、それも七月はじめには鎮圧された。

リエルは反逆罪で絞首刑に処された。ケベック州民は、大半がフランス系のメティスのために戦った彼の助命を嘆願したが、聞き入れられなかった。（Y）